

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	熊田 岐子
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
空間表現の身体性を重視した英語文学読解指導			
論文審査担当者			
主 査	教授	中尾	佳行
審査委員	教授	柳瀬	陽介
審査委員	教授	築道	和明
審査委員	教授	山元	隆春
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、文学教材を用いて空間表現の身体性を重視した読解指導を実践し、その実践がいかに学習者の空間表現の理解を広げ、深めていくのかを検証するとともに、文学教材の使用意義を実証的に示すことを目的とした。</p> <p>第1章では、まず、1980年代のコミュニカティブ・アプローチの影響により、日本の英語教育において、文学教材は減少傾向にあることを述べ、検定教科書や大学総合英語教科書での文学の取り扱いの実情を明らかにした。文学を日常言語の概念体系の延長線上にあるものとして見立て、認知言語学の知見を取り入れた文学読解指導を試みることを述べた。英語学習者（大学生）を対象とし、文学に現れる空間表現を通して、その日常言語の概念体系に習熟させるとともに、延長線上で文学の読みの深さ・多様性に気づかせる、可能性を示した。空間表現とは、空間関係という概念体系の本質を言語化したものである。at や on などの前置詞、up や down などの副詞に着目した。</p> <p>第2章において、外国語教育（英語教育）における文学使用法の先行研究を概観し、問題の所在を明らかにした。日本国内外における文学の使用法の検討に見られるように、本研究は、文学の衰退は文学にあるのではなく、その使用方法に問題があると考え、その使用方法の再検討を試みることを明示した。</p> <p>第3章において、まず、文学と空間表現がどのように関係するのかについて、Leech and Short (2007) における談話空間の複層性から空間表現の役割を論じた。空間表現が使用されている描写に着目し、物理的描写と心理的描写の関係性を明確にした。また、Stockwell (2002) を参照し、談話が複層化された文学を、空間表現に着目して文学を読解していけば、その表現を手立てとして、読者が物語へ入り込み、文学の登場人物や語り手の視点から事象を読み解くダイクティックな観点が期待できることを示した。次に、Langacker (2000) や山梨 (2000) を引用して、スキーマ理論を用いながら、空間表現の身体性を重視した文学の読みについて検討した。さらに、空間表現が備える身体的要素について述べた。</p> <p>以上を踏まえて、以下3点の研究課題を設定した。</p> <p>1) 英語学習者（大学生）に対して、空間表現の身体性を重視した文学読解指導を実施し、空間表現の身体化による空間表現の文法的理解が、どのように、また何故変容したか。</p>			

- 2) 空間表現の身体性を重視した文学読解指導を実施し、空間表現に基づいた文学的な読みについての気づきが、どのように、また何故変容したか。
- 3) 空間表現の身体性を重視した読解指導を受けた英語学習者（大学生）が、読解指導から約5カ月の一定期間において、空間表現のイメージスキーマをどの程度に定着させ、空間表現に着目しながら文学読解できるのか。

第4章では、研究課題1を取り扱った。1) 教師によるスキーマ提示を含んだ空間表現を中心とする文法指導・日本語訳の口頭説明、2) グループ単位での劇発表、3) 映画視聴、4) 学習ポートフォリオの記載を基本とした指導を実施した。使用教材は、Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) である。

第5章では、研究課題2を実施するにあたり、(1) 13回に渡る読解指導の結果、文学読解テストに読みの視点の変化は表れるか。(2) 学習ポートフォリオにおいて、文学的な読みの深まりと映画の影響はどのように表れるか。(3) 学習ポートフォリオにおいて、文学的な読みの深まりに劇活動の影響はどのように表れるかについて検証した。

第6章では、研究課題3を実施するにあたり、(1) 指導項目であった target word のスキーマ図が描けるか、(2) 指導項目であった target word から、他の空間表現の理解へと進むか、(3) プロトタイプのな字義通りの意味から、拡張事例の一つである心理説明へと進むか、(4) 空間表現に基づいた文学的な読みの定着は見られるかを検証した。

第7章では結論として、各研究課題について、以下の3点にまとめた。

- (1) 本稿で挙げた空間表現の身体性を重視する読解指導は、空間表現指導の蓄積に関連しながら、空間表現の文法的理解を導いた。
- (2) 本稿で挙げた空間表現の身体性を重視する読解指導により、登場人物の身体的な動作や位置関係に着目し、登場人物の心理面についての考察、つまり、文学的な読みが深まりを見せた。また、劇活動・映画に影響されて、文学的な読みを深めていた。
- (3) 本稿で挙げた空間表現の身体性を重視する読解指導は、約5か月の一定期間においても、会話や英作文などの他の英語学習に影響されながら、スキーマは持続されるのがわかった。また、スキーマは他の空間表現理解へも影響を及ぼした。さらには、文学的な読みも学習者が取り囲む文脈を一層広げ、読みを反復的に再構築していく可能性が見られた。

教育的示唆として、以下の3点が挙げられる。

- (1) 劇活動、映画視聴により、文学テキストの活字を学習者が身体を通して実感する方法を示した。
- (2) 文学の談話空間を有効活用すれば、文学は英語教育、ここで示した前置詞学習に対して適切な教材と成り得ることを検証した。
- (3) 文学の談話空間を有効活用することで、認知言語学においてその指導法は未だ開発中ではあるが、前置詞に基づいた空間表現指導の効果を実証的に示すことができた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年2月18日

